

さっぽろ高校生演劇合同ワークショップの10年

全国高等学校演劇協議会事務局

北海道大学教育学院生徒指導論講座 D 1

北海道札幌稲雲高校

中島 憲

一 はじめに

石狩高校演劇合同公演の休止(二〇〇三年二月)から三年が経った二〇〇六年に札幌稲雲高校に赴任した。支部大会に初めて参加したとき、支部内の技量の格差が大きく開いていた。しかし、自分たちで何とかしようと考える顧問はいないようであった。多忙な中でそれは仕方ないと言うことだった。自分たちが舞台を創るのが精一杯なのだ。有力校は全道大会に進むのが当たり前で、指導する顧問が居ない学校はそう簡単にすぐに行けるものではないという諦めも感じられた。しかも、作品は特定の基準で計られており、幅も狭く、「構成上の完成度」と「その場でウケたかどうか」に重きを置くような審査がなされていた。もう一つの評価軸は、高校生が顧問の介入なしで自分たちで考えてやり遂げることこそ重要なのだという自主活動重視である。これは一見正しいが、この時重要なのはきちんと顧問が寄り添い、見守ること

である。演劇について熟知した上で徹底的に高校生の考えを引き出し、さりげなく導いていかなければならない。もっとも難しい指導の形態だと考える。しかし、無責任へのいいわけにしかならない状況が多いと感じた。生徒がやっていることなのだからそれでいいと。これでは前任校があった南空知に居て、石狩の高校演劇の水準が下がったと感じたのも仕方ないことだと確信を持った。これを解消するために必要なのは、共有出来る舞台創造技術の拡散が最重要だと考えた。そこで、石狩合同公演再開の方向性を探ったが、良い感触が得られず、自分たちでできることから始めようと考えた。

石狩高校演劇合同公演は、体裁としては休止しており、合同公演の積み立ては毎年行っている。三年に一度実施するだけの金額を積んでいるが、六年に一度回ってくる全道大会の運営資金となっているのが実情である。これもまた仕方の無いところなのかもしれない。再開出来る

い理由として、練習期間の保証がないと言うこと。もう一つは、演出部の教員が固定化され疲れてしまったこと。この二点をクリア出来ないといけないのだと言うことであった。その他、練習場所の確保が出来ないと言うこともあげられた。

これらの課題を解決するために調整に入った。その結果、比較的若手の数名の顧問らに働きかけ、有志による高校生演劇合同ワークショップ（以降合同WSと略称する）を立ち上げる事が出来た。北翔大学北方圏芸術情報センターポルト舞台芸術研究グループ（以下舞台芸術研究Gと略称する）及び北翔舞台芸術^{（注）}との協同プロジェクトとしての出発である。この取り組みを通じ、その後の進路の一つとして北翔舞台芸術に多くの卒業生を送っている。北翔舞台芸術からも、照明スキルや音響、顧問に対しての演出に関する指導、北翔舞台芸術の舞台への招待など多くのサポートを受けてきた。照明・音響・舞台・演出などの北翔大学非常勤講師からの指導は、生徒・顧問の学びとして重要な位置を占めている。生徒たちのお互いの引き継ぎも含め、生徒たちだけで創る形態の演劇部であっても、高い舞台水準を維持出来ている。

課題とされていた練習の保証についてはスポーツ保険に入り、合同WSの主催であれば一年間は自宅から練習場所までの往復と練習中について保険の対象となる。また、資金源として独立行政法人国立青少年教育振興機構

の子どもゆめ基金を申請している。練習場所については特にポルトホールを使用しているが、舞台芸術研究Gだけに頼らず、自己資金と併用しての全体の取り組みとなっている。

運用面から観ると、高校演劇部の合同練習としての面、北翔大学舞台芸術研究Gの高大連携、合同WSとしての合同発表会の三つの視点となっている。これを統合したワークショップとして現在に至っている。

当初参加したのは、札幌西・札幌稲雲・札幌山の手・札幌国際情報四校。その後、子どもゆめ基金からの資金を獲得、その対象条件が札幌全市からの公募となったことから「西札幌」から「さっぽろ」へと呼称を変えて今に至る。参加生徒も延べ一〇〇〇人を超えつつある。

この取り組みの中から演劇に進路を取る者も増え、北翔大学舞台芸術へ進学するものをはじめ、京都大学で演劇と教育について考察を進めているものやスタッフやキャストとして札幌や東京で活躍をし始めている。

このワークショップの変遷と、参加生徒の意識の変化をアンケートをもとにこの一〇年を振り返ってみる。



山姥

二 経緯

高校間の軌轢をなくすこと、お互いの舞台技術を交流することを目的に一九六九年に始まった石狩高校演劇合同公演は、顧問の固定化、疲労感の蓄積、生徒指導の困難感などにより、二〇〇三年二月に第三五回公演を最後に休止を余儀なくされた。休止について、その年の二月、高校演劇の会合があり、石狩が今困っていると聞いた。伝統ある合同公演を行うには今のメンバーでは厳しい状況となっており、しかし、先輩たちのことを考えると止めるというわけにも行かないと。その時、筆者は「いわずにわ高校演劇合同公演は一年間休止したことがあります」と答えた。ある年の二年生が、演劇に対しては一生懸命取り組むのだが、チケット販売など金銭面と生活面でもあまりにも信用出来ない状況が続いたため、残念だけれど、来年の合同公演はありませんと宣言して休止したことがあった事を伝えたのである。「そうか、休止するとういう言い方もあるな。」と言うやり取りがあり、その年のうちに本当に「山姥」をもって当面休止という流れになった。

休止前後の石狩高校演劇は迷走していると隣の支部からみていた。方向性を見失っているかのようであった。全道大会に推薦されてくる石狩の舞台は、少なくとも石狩以外の各支部がいくら頑張っても届かなくて悔しがるような舞台では無くなっていた。

石狩支部に赴任し、まず行動したのは、石狩合同公演

の復活の可能性を探ることであった。しかし、当時の事務局に再開の意志はなかった。

さらに私が来たことで「昔の石狩の状態」に戻すのかという警戒さえされた。専門委員会の場で、「生徒を休日まで振り回し、顧問の思いだけであちこち引き回して取材して創るような強引な舞台をやること自体間違っているのだ。」と言うある専門委員の発言と、それに対する同意あるいは保留の空気を感じ、合同公演を復活させるなどと言うレベルの話では無いと感じた。そもそも休日には部活動を行うこと自体が間違っていると何も出来ない。

これは他の方法を探らなければならない。資金はどうなる？練習場所は？発表は？立ち上がり資金をどのように調達するか？課題は山積みであった。そこに声を掛けてくれたのがポルトの舞台芸術研究Gであった。ポルトホールを用いた高校演劇応援のためのプロジェクトの提案を受け、とにかく始めようとゼロから生み出したのが第一回の西札幌高校演劇合同ワークショップである。以来、四月第二週より土日のみで最大一七日程度、最短期間の一四日の極短期の日程で立ち上げから、稽古、立て込み、リハーサル、上演を行っている。

当初から一つの舞台の上演を目的として創り込むのではなく、『一つの脚本を元にして演劇創造のプロセスを学ぶためのプログラム』として位置づけた。十分な練習時間を確保出来るわけも無く、満足のいく舞台に到達す

るのにはあまりに短すぎる。

毎年六〇〜九〇名の高校生達と十数名の顧問が参加する。実行委員会形式で行っているが、参加資格は高校演劇を理解し、応援してくれる大人たちと、高校生である。以降、舞台芸術研究Gの共同研究として本ワークショップは確立されたものとなっている。特に、WS講師陣として、非常勤講師の衣裳・照明・音響・装置などの札幌の一流の専門家のアドバイスを受けられるシステムは他に例を見ない。

舞台芸術研究Gに頼り切らない資金調達を考え、少しでも還元するため二〇〇九年より「子どもゆめ基金」を申請した。これを機に、二〇一〇年よりさっぽろ高校生演劇合同ワークショップと名称変更し、今に至る。

現在の高校生は多忙である。毎日の学習課題や小テストの追試、講習、週末課題の清算などで平日に練習を行うことが単独の部活でさえそろわず困難である。札幌の学校は、地方で経験を積んできた教員が多い分、丁寧な指導が行われている。その分思考停止気味となっている。それで教員は余計に手を掛け、過大な要求を迫る。結果として放課後や休日に大きな負荷を掛けている。特に平日の校外練習はほぼ不可能である。

この取り組みは決して往年の合同公演のようにじつくりと時間を掛けて名作を創りあげるような性質のものはなれないのだ。

ただし、平日五日間の間にキャストやスタッフが様々

な準備をして土日に集中して練習することで、練習日数以上の舞台制作を可能にしている。実際、キャスト確定の翌週には台詞が入ってくるキャストが多い。また、台詞が入ったキャストが幾人かでも出現すると、他のキャストも頑張らざるを得ず、結果として非常に速いペースで舞台創造が進んでいく。

このハイペースの舞台創造の経験が参加校生徒・顧問にとって、演劇創造の入門システムとして重要となっている。その結果、専門指導可能な顧問が不在でも演劇活動を高校生達だけでも維持する事も可能となっている。高校生だけで活動するためには、方法を教えていかななくてはならないことはこれまでの結果を見てもあきらかである。また、これを機会に創作脚本に挑む顧問も生まれてきている。

取り組みの最大の弱点は参加生徒人数が多すぎることかも知れない。大人数で行う活動の限界について考え、これをクリアするためにキャストの数やスタッフの役割を明確にしてしつかりとそれぞれに取り組み、参加した生徒が目標を持って取り組ませるような工夫を重ねてきた。特に、キャストイングオーディションから漏れた生徒がスタッフに入っていく方法をとっているため、そのモチベーションの維持には当初からずつと気を遣ってきた。スタッフ専願の生徒も多いが、キャストになれなかった生徒も混在し、この生徒のモチベーションがスタッフ全体へ波及することが無いようにするため、明確な目的

意識を持たせて取り組んでいる。また、キャストとスタッフの間が乖離しないように声を掛け、お互いが一生懸命取り組む姿を見せ合う事を心がけている。発表した舞台の概要と経過詳細については別記録(二二頁)を参考にさせていただきたい。

三 主旨

舞台創造活動を学ぶ機会は、高校演劇顧問にはほとんど無い。見よう見まねで何となく舞台づくりを手探りでやってみよううちに何となく捕まえた漠然としたものを手探りで、あるいはそれほど多くは無い機会で人に聞き、それをまねてみる。そのような状況で活動が進んでいく。自分の創っている作品が演劇として成立しているのかどうなのかさえ確信が無い状況で、顧問として活動するしかない。

演劇創造はフォーメーションプレーであり、キャストの演技法にしても、たとえば篠崎メソッド(註二)は実際バスケットフォーメーションの理論を背景にしてできあがっている。実際に理論と現実を結合して舞台を創っている劇団はそれほど多くは無い。スタ



さらば！原子力ロボむつ

ニスラフスキーの俳優修業(註三)など読まなくても舞台づくりを初めて、手探りで舞台創造を続けていくことで、似たようなテクニクを身につけていく事になる。求めるものが同じであれば、登山のルートはいくつもあつた。方法論は違ついても求める方向は結局近づいていく。

ただし専門的にこれを学ぶ公的な場が無いのが日本の演劇活動の最大の弱みである。これは他には無い特殊性かもしれない。球技にしても武道にしてもルールや所作は決まつており、そこからはみ出すことは基本無い。芸術でも、美術や音楽はそれぞれの流派がある。『素人集団の塊』確かに我々はそう言われても仕方ない無根拠な活動をしているのかも知れない。それでも人の心を動かす舞台を創造することは可能なのではあるが。

地域で高校教諭が演劇を学ぶ場は今ではほとんど皆無である。仮にあつたとしても学校から外に出て活動することは非常に困難である。結局、高校演劇の大会で交流出来る可能性があるだけで、特に積極的に生徒につきあう気持ちが無ければ、それ以上踏み込まなくても専門的な顧問が全体を見守っているだけで自分が加わる必要も無い状況であり、多くの顧問がそこで留まつている。

一部の熱心な顧問と、多くのつきあうだけの顧問。時には、支部大会の割り当て自体に対して責任を負わない顧問や、自校の上演の時に舞台上に立ち会わない顧問も少なくない。

繰り返しになるが、吹奏楽の顧問の多くは幼少の頃から専門的に音楽を理論からしつかり学び、練習理論も含め確立されたものを用いて芸術活動をしているのである。手探りでしか無い、何の根拠も持たない演劇をやっていることなど根拠も意味など無いと断言する人も居ると聞く。そう言われると、音楽や美術は国立大学芸術学部で学ぶことが出来るが、演劇にはそれが無いのは事実である。

では、顧問不在の部活動をしている生徒たちに何か確信があるのかという又何も無いのである。それでもやろうとするのは若さなのかも知れない。「絶対」が無いのだから何をやっても良いのではあるが、最終的に到達する舞台で観客の心を揺さぶることが出来るかどうかさえ全く考えない舞台も多い。しかし、それでも生徒創作で光る生徒は数は少ないが確実に存在して卒業後も芝居を続けており、今の札幌の演劇シーンを形作っている。高校演劇を経験していない演劇人も非常に多く、顧問の指導によって型にはまったような演技しか出来ない者を批判的に観ることも多い。高校演劇出身であることを隠すような風潮も昔から演劇人の中には多い。

生徒も顧問も演劇を学ぶ場を創りたい。そして学校間の交流を深め、お互いに切磋琢磨し、高いレベルのライバルとして頑張りたい。かつて石狩の顧問たちがそうしたように、我々も及ばないながらもコツコツ頑張りていきたい。そんな思いでこの活動は始まっている。以前高

校生はもつと自由だったと思う。放課後、十分な時間をかけた活動が出来た。顧問も演劇のことだけを考えて一年中取材して歩くことも出来た。いまはどうだろうか。授業と部活動以外に掛けなければいけない時間がとても長く、十分に生徒と向き合うことさえ許されない。

遠い過去のように、平日朝練六時過ぎ〜八時まで、放課後も本番前は日をまたぐなどという活動は不可能である。まず、生徒の身体が保たない。

この状況で、休日だけで練習を行う合同WSが十分な練習時間を確保出来ているわけでは無い。四月の第二週から五月末までの一二〜一七回×約六時間で一つの舞台の完成を目指す。自身の経験からしても、満足行く舞台創造には時間がかかる。

前任校で取り組んできた「いわみざわ高校生演劇合同公演」(注四)では、一二月に旗揚げを行い、上演は三月下旬。平日二時間休日七時間の練習を積み上げ、最低三〇回は顔を合わせて取り組んでいた。三分の一の練習時間で十分な演劇創造ができるわけでは無い。ほんのさわりを経験させてみる程度である。筆者が転勤(注五)した二〇〇六年と七年に岩見沢のNPOはまなすと連携して取り組んだ合同公演(いわみざわ市民劇)は、平日は勤務時間後に急いでも高校生の練習時間に間に合うことは出来ないため、平日は地元で居た劇団員がサポートに当たり、土日に筆者が集中して演出をする形で舞台制作を行っていた。

全体での練習時間がとれなくても平日自分で脚本に向かうことで、土日のみの練習時間であっても舞台化がなんとか可能であった。この時も、生徒達は練習と練習の間の平日にセリフを入れる作業をおこない、頑張るキャストの中には、キャスト決定発表の翌週には台本を外して練習するものも居た。それを見て周りのキャストも努力するため、セリフが入った状態で演出を始める事が可能であった。

岩見沢での取り組みも、一二年を越える伝統があり、先輩から後輩へ次がれていく技術があった。この取り組みは、札幌へ転勤してから二年継続することが出来たが、時間的な課題などが積み重なり、社会教育的に発展させようとした取り組みもうまくいかずに終了することになってしまった。合同公演が終了してあつという間に南空知の高校から演劇部が全て無くなってしまったことが残念でならない。

四 参加した生徒の概要

ワークショップに参加する生徒は、各校の演劇部所属生徒と生徒の友人関係でやってくる演劇部の無い高校からの参加・チラシを見て飛び込みで入ってくる高校生によって構成されている。演劇部があつてもそこに所属しない生徒もたまに参加してくる。学力層も幅広く、時にはあきらかに適応障害を持つ生徒も参加してくるが、時として浮いてしまうような生徒たちを飲み込むゆとりが

彼らにはあるのが頼もしい。彼らに対し非常に暖かいのである。前回から参加した高等養護の生徒たちも違和感なく集団と一緒に活動出来ている。これは特筆すべき状況であると考ええる。

三年生は、受験準備の関係もあり、高校演劇最後の舞台として位置づけ、意気込んで参加してくる生徒も多い。一年生は、入学まもなく連れられてきて「何となく演劇の戸をたたいてみた」と言う生徒も少なからず居る。この取り組みの後、はまり込んでいくものと止めてしまうものが居るが、それほど各自のモチベーションの違いは大きい。三年通して参加する生徒も居るが三年で初めての参加も相当数あり、当初、グループの緊張は高い。経験ある生徒達が、積極的に声かけをしているのが良く観られる。初参加の生徒は、経験したことの無い集団の中で不安と緊張に満ちている。時には一度顔を出したきりの生徒も居る。これまで最大で名簿上一〇〇名を超え、平均的には七五〇名ほどの高校生が参加してくる。毎年修了後のアンケートを回収し翌年に生かしてきたが、特に二〇一三年から毎年事前と事後にアンケートを行い、どのように変化成長したのかを分析している。基本的にこの一〇年間生徒の大きな意識の変化はなく、参加した生徒たちは一定の充足感を持って最終日を迎えている。

これを元に二〇一三年北海道大学教育学院修士論文『演劇創造のプロセスが高校生に与える影響について』

演劇合同ワークシヨップを事例に『』としてまとめることができた。その要旨を抜粋して次に示す事とする。

五 合同WSの方法

毎年新たに構成される生徒達を、スタッフについて説明、まず全員のスタッフ希望を取る。スタッフとは、演出（顧問演出の補佐）・舞台監督（スタッフと演出の連絡および本番当日の動き全般）・道具（太道具と小道具）・衣装メイク・効果（音響と照明）・制作（金銭管理・広報・チケットとパンフレット作成）の六つの部門である。ここには顧問がそれぞれ指導的立場で配置されている。

続いてキャストを確定するため、顧問演出が上演作品にあわせ、表現力や身体能力を勘案して選抜していくオーディションを行う。対象はスタッフ専願の生徒以外である（注六）。特に重要なのは、集団づくりのための演劇表現遊び（注七）である。顔合わせの四月、スタッフ分担任もキャストイングも決まっていない時期に行うことで集団形成の促進に効果がある。また、ダンスの指導者も顧問の中に居るため、身体能力観察と身体解放を兼ねて十分な時間を取ってダンスを行う（注八）。アイスブレイキングやダンスをしている様子を見て演出顧問は生徒の可能性を見いだしていく。観察内容として、コミュニケーションの様子、身体能力、発語の正確さ、リーダー性を見いだすことなどがある。少ない日数のため、初日からオーディションが始まっているのだ。

二日目からは正式にオーディションがスタートする。分担希望のなかでキャストを希望しない生徒以外全員に対して台詞の読みとダンスによる身体能力の選抜を行う。キャストイングも兼ねているため、うまい生徒、身体能力の高い生徒が必ずしも残るとは限らない。体型、印象など努力ではどうにもならないこともオーディションの要求に入ってくる。

キャストイングに残った生徒達のモチベーションは大きく、その後のアンケートを観てもスタッフと比較して全体的に意欲的な傾向が見られる。オーディションの後行われる全体ミーティングが重要な意味を持つ。スタッフの重要性とオーディションに対する考え方を伝える場である。オーディションで落ちたスタッフのモチベーションがその後の舞台づくりに大きな影響を及ぼすからである。特に舞台全般を見渡す舞台監督と演出は非常に重要である。ここで動ける生徒が居ないと舞台が回らない。しかし動けるような生徒は役者としての能力も高いのである。舞台を裏から支えることに意義を見いだすことができる生徒が多いと良い舞台につながる。それだけに顧問は、スタッフ生徒に対して篤く指導している。本番直前から本番後に向かうに従って彼らは成長していく。何らかの形で舞台上がるのは、全体の八割程度である。そこから漏れてしまうことは、三年生にとつては最後の舞台でもあり、シヨックは大きい。

はじめ筆者はこのオーディションスタイルについて違

和感を唱えていた。集まっていきなりセンスを観るからと言って演技もしていない高校生に引導を渡すのは困難かつ残酷だと思ったからである。しかし、生徒のアンケートを観ると、キャストイングについて一気に決められた方が良いという意見が圧倒的であった。意外と生徒達は結果に対して異議を唱えない。内面はわからないが一生懸命にスタツフリーダーとして活動している。これもまた、この取り組みで得られる収穫のひとつかもしれない。

六 通常の部活動との違いについて

合同WSと演劇部の通常活動とはどのように違うのか、反省アンケートから生徒の視線で眺めてみる。KJ法により次の項目にまとめられる。

- ①多くの仲間と団結できた。
- ②異なる環境で活動しているため、舞台に対するもの考え方の違いがあることを知った。
- ③知らない人が多いなかで取り組んで大変だった、あるいは緊張した。
- ④多くの人たちがいて様々な考え方があることがわかった。



都会の森の物語

- ⑤コミュニケーションを取らなくてはならず、部活動以上にコミュニケーション能力が向上した。
- ⑥動いている金額の大きさ。
- ⑦大人の指導者（顧問・劇団員）と本格的な装置（音響・照明・舞台装置）のなかで一緒に舞台づくりを行い、学ぶことが多かった。
- ⑧プロの照明家や劇団員など大人の視点で舞台づくりを学ぶことができた。

単独の部活動ではあり得ない人数の多さ、指導者が複数居て全てのスタツがそれぞれ指導を受けられること、上演を終えるまでは抜け出せない重圧との闘い、未知の他者を認識せざるを得ない違和感とともに、コミュニケーションを取らざるを得ない違和感などが多く語られている。また、生徒自身の中の演劇に関する考え方が大きく変化せざるを得ないのもこの取り組みの成果だと言える。ただし、この取り組みは楽しく、非日常的空間の中に自分を置く事が出来るため、万能感を含め、勘違いしてしまいやすい空間でもある。このような経験の中で、通常の部活動で得られない体験をとおして、演劇に対する考え方が変化し、学びを得ている実感があると言ったことがあきらかになった。次に自身の変化成長について考えていく。

七 変化成長の実感とはなにか

二〇一四・一五の二年間の取り組みのなかで一二八名がこの項目について回答した。その内およそ三分の一に当たる三六名が、他校生徒とコミュニケーションを取り、会話できるようになったことをあげている。事前アンケートでまず調べたのは生徒の性格である。その中でも「あまり知らない他人と会話をすることは得意では無い」ことを演劇部員達が筆頭にあげていることが特徴的である。演劇をやっている生徒は、自己顕示が強いのでは無く、どちらかという与他人と付き合いが苦手だという意識が強めだと言うことである。高校生の時期は比較的那う言う傾向が強くなる時期であると考えられるが、演劇部員たちはより強い傾向が見られるのだ。

次にWSに参加して得られたことについて、演劇に対する考え方や、技術向上の変化二〇・積極的行動一八・視野拡大一六・自分に自信・メンタル強化一〇と続いている。これらも事前アンケートで垣間見える参加生徒の消極性から観ると大きく変化していることがわかる。他者の考えに触れ、協調し、コミュニケーションを取らざるを得ない状況から、自分が成長していく実感を持てるのだと考える。

この結果から、少なくとも参加した生徒が始まる前の比較的消極的な自分から積極性と対話、たくさんの人が関わっていると言うことに対する思いや自分自身の強化について十分な実感を持っていることがわかる。また、

その変化は家族や顧問など身近な大人も感じることが出来る大きなものだとと言える。

八 アンケート回答から見えてくること

回答を通じて見えてくることは、高校生が自分で考えて行動しようとする意欲が生まれていることだと考える。それをデータでも確かめることができたことは大きな収穫であった。

ここでもスタッフの充実感について非常に慎重な配慮を要すること、その配慮が行き届いたときにはじめて参加した高校生が全員何らかの成就感を持つことができることがあきらかになった。

実際に参加してきた高校生の中にはこの大集団に全く入ってくることができず、大勢の高校生の姿を見ただけで来なくなった生徒や、何度かは来てみたものの、自分から動かないと何も得られないこの集団では自分の位置づけができず、キャスト選出のオーディションで落選した後は来なくなった生徒もいる。反対に集団に入れずにそれでも毎回集まりに姿を見せる努力をする生徒も居た。

また、この集団の特徴として、特別な配慮を必要とするような生徒が入ってきた場合に非常に暖かく受け入れ、自然に扱うことが可能な点がある。その結果、多数の生徒の参加実感は「非常に良かった」、「勉強になった」、「楽しかった」という回答を示す。記述回答を視て

も肯定的な意見が多い。「新しい仲間たちとより深い芝居作り。おかげでより演劇に対する意欲がわいた」「姉に、WSを語っているときの顔が良くなったと言われてびびりしました(昔は表情が固いと言われていたのに)」「土日を使っているため休みがないので、すごく大変でしたが、その大変さ以上に楽しかったし、得られたものも大きかったので、とても充実した時間でした」などの肯定的感想がならぶ。

これらの感想には、彼が演劇創造に真摯に向き合った結果、どのように内面の変化を実感したかが見えてくる。高校生は演劇体験をすることで、たとえ短期であっても大きな変化が現れることの具体的証明の一つである。このほかにも色々な感想があるが、いずれも他人の存在を認められるようになり、自己否定が減少したという感想が多い。今の若者に求められる最も重要なコミュニケーションの能力は個性の違いや獲得する内容や差はあってもこの場で習得可能であることがあきらかになった。

九 これからの展望

合同WSは、参加している部活動にとっては、年度初めの演劇創造活動として定着しており、演劇を創るために必要なことを学ぶ重要な場となっており、これがアンケートの数値からもわかる。これらの充実した時間が年度の初めにある事で参加者全体が成長出来る。

その結果、二〇一六年度は石狩支部大会から全道大会

へ推薦された六校全てが合同WSに参加経験のある学校となった。その中で新篠津高等養護が全国春季高校演劇研究発表大会に推薦され、札幌山の手が優秀、石狩翔陽と札幌稲雲・琴似工業定時が優良と上位を占めた。二〇一七年度は半数の三校が合同WS参加校となり、札幌北斗高校が、春季大会へ推薦を受け、二年連続で全道大会で上演することとなった。合同WSの成果は着実に結果として表れていると言える。

二〇一七年は、外部演出として北翔大学非常勤講師のイナダヒロシ氏を迎え、新たな局面へと進んだ。上演脚本は、道内町民劇で使用してきた脚本を高校生用に直した作品である。これをイナダ氏の演出で創り込む事になった。イナダ氏の演出とこれまで創ってきた方法とは構造が異なる。こだわるのは台詞に含まれる言葉と感情に対する向き合い方。「どうせへタクソなんだから声を出せ」「何でもいいから気持ち届け」「何でもいいから気持ち届け」「怒鳴り散らすを届けろ」と怒鳴りながら懸命に頑張る高校生達。と言う構図が新しい展開を生み出した。舞台に対する緊張感も大きく成長する元となった。高校演劇はぬるい。そう言われ



霜冬別嬪さんのこと

るのは、舞台で飯を食うわけでは無いことから来る甘えなのか。そんな事を前から考えて居たが、まさにその部分で正面からぶつかってくれる大人がいることに感謝である。スタッフは少し萎縮気味ではあったが、要求に応えるために顧問も生徒も頑張った。一〇回で完結せず、前に進むために必要なカンフルとしてのイナダ氏招聘は、初期の目的を果たして幕が下りた。観客の感想は、これまでの高校演劇らしい舞台では無くなった事への批判と、新たな展開を見せた合同WSへの期待が半々の結果となった。

また、新篠津高等養護の生徒の参加があったが、彼らを自然と受け入れる彼らの姿勢は見事であった。

この先もとどまること無く前に進むため、様々な可能性を求めて誰とでも舞台創造についての取り組みを進めていきたいと思っ願っている。

注一 北翔舞台芸術は北翔大学教育文化学部芸術学科舞台芸術分野および北翔大学短期大学部ライフデザイン学科ファッション舞台アートコースで舞台芸術を専攻する学生の総称である。

注二 篠崎メソッドとは、東京の篠崎スタジオ主宰の篠崎光正氏の演劇法である。特に子供たちを育てることに定評があり、ミュージカル「アニー」の演出で知られている。

注三 コンスタンチン・セルゲーヴィチ・スタニスラフスキー一八六三

〜一九三八

ロシア・ソ連の俳優・演出家。彼が創り上げた俳優の教育法をスタニスラフスキー・システム。著作に「俳優修業」がある。

注四 一九九四年〜二〇〇八年岩見沢西・東・緑陵・岩見沢農業・美唄東・美唄南・美唄聖華・栗山高校を中心とした取り組みで最大一〇〇名の参加があり、動員数は、毎年七〇〇名前後、一時は美唄市と岩見沢市の二市公演を行っていた。

注五 岩見沢から手稲へ高速長距離通勤していた。(片道五三km)

注六 スタッフ専願で参加してくる生徒はあまり多くないのが近年の特徴である。上演日程が完全には合わない生徒も含まれる。キャスト決定後にスタッフが確定するが毎年配分には苦労している。

注七 シアターゲームを応用している。アイスブレイキングと集団への親和性などを観察するために有効である。

注八 身体能力を観察する場となるため、演出は、全体を観察している。

項目1 今回のワークショップで自分自身に変化が起きた。

1. 思わない (4) 2. あまり思わない (21) 3. そう思う (85) 4. とてもそう思う (38)

項目2 起きた変化とはどのようなものですか。

知らない人と話ができるようになった	25	視野を広げて周囲のことを考えて行動できるようになった	16
積極的に行動できるようになった	14	演劇が好きになった	13
自分から意見を言うようになった	8	責任感が強くなった	7
人と話をするときに緊張しなくなった (人前で話せるようになった)	5	明るくなった	3
観客の視点で舞台を考えられるようになった	2	友人が増えた(関わりが増えた)	2
冷静に考えられるようになった	2	人の目を見て話せるようになった	2
仲間と芝居を作っていて、とても楽しいと思った	2	自信がついた	2
やりがいを感じた	1	演劇が簡単にできるものでは無いことを知った	1
感謝の気持ちを持てた	1	メンタル面が前よりかは強くなった	1

項目3 今回のワークショップを通してあなたが得たものは何ですか？

明るくなった元気になったと言われた	9	積極的になった自分から動けるようになった	4
声がでかくなった	3	生き生きして舞台楽しんでたねと言われた	2
周囲と協調して動ける	2	家族が今までにない面を見て驚かれた	2
表情が出るようになったねと言われた	1	疲れているのに楽しそうだねと言われた	1
少し社交的になった	1	素顔がかわいい	1
印象を悪くした	1	母に笑われた	1
土日にワークショップが入ることで生活にリズムが出て来た	1	言わなくても起きてくること	1

項目4 もともと知らない人とでも話をする方だ。

1. 思わない (17) 2. あまり思わない (64) 3. そう思う (57) 4. とてもそう思う (10)

項目5 合同の取り組みについて、通常の部活動と比較して何が違うと考えますか

人数が多いこと・環境の違い・やり方の違い・もののとらえ方の違いを超えて一つの舞台を創る	76	指導者が居ると言うこと	9
質の違い・舞台技術・大道具・照明家	9	お金のかかり方	5
お客さんにお金を払って劇を観てもらうこと	2	少ない時間で演劇を造る	7
とても厳しい	4	普段知らない人とはじめて協力して芝居作りをする	4
メリハリがあると言うこと	3	キャスト決定(オーディション)	2
仲が良い・協調性・集団を意識する力・周囲に配慮すること	2	リーダーシップの多さ	1
団結力がある	1	演劇部員で無くても参加できる	1
制作の仕事	1	呼吸が合わない場面もあった	1
小さい枠にとられない、自由な舞台作りができる	1		

自由記述より

- ・規模は勿論のこと、集団演劇と我が部の少人数づぶりではやる演劇の形態が根本的に違いありますが、周りとのコネクションをより積極的にとっていくことがそのまま成長に繋がって行くというのは面白いです。
- ・様々な考え方の人間がいて、相性があるって、遠慮無遠慮、たいして仲良くないのに近しい役になっちゃった、とか、こういう演技ならあの人に聞きたい、何考えてんだ、そういう演劇と日常の境界付近にあるものが、問答無用で全部演劇になってしまう。
- ・ある程度慣れて家族のような校内の部活動ではなかなか体験出来ない感覚でした。無論、自学自習型の我が部において、このような場で、それぞれの先生方の演劇に触れられるのは技能的、精神的にも大きな影響を全員に及ぼします。(これがまたワークショップという短期間の中の営みであるからこそ、うちの高校の生徒(自分含)にはかなり効くのだと思います。)